

—JNMS のページ—

Journal of Nippon Medical School に掲載した Original 論文の英文 Abstract を、著者自身が和文 Summary として簡潔にまとめたものです。

Journal of Nippon Medical School

Vol. 82, No. 1 (2015 年 2 月発行) 掲載

Glomerular Capillary and Endothelial Cell Injury is Associated with the Formation of Necrotizing and Crescentic Lesions in Crescentic Glomerulonephritis
(J Nippon Med Sch 2015; 82: 27-35)

半月体形成性糸球体腎炎の壊死性・半月体形成性病変の発症には糸球体係蹄内皮細胞傷害が関連している

藤田恵美子¹ 長濱清隆² 清水 章² 青木路子^{1,2}
肥後清一郎^{1,2} 安田文彦^{1,2} 三井亜希子¹ 福井めぐみ¹
金子朋広¹ 鶴岡秀一¹

¹日本医科大学腎臓内科学

²日本医科大学解析人体病理学

半月体形成性糸球体腎炎の病理所見は壊死性・半月体形成性病変に特徴づけられる。本論文の目的は、壊死性・半月体形成性糸球体病変の発症や進展に関わる糸球体毛細血

管傷害の特徴を明らかにすることである。

抗好中球細胞質抗体 (ANCA) 関連血管炎 (n=45)、抗糸球体基底膜腎炎 (n=7)、ループス腎炎 (n=21)、紫斑病性腎炎 (n=45) の腎生検組織を用いて、光顕、電顕に加えて、CD34 の免疫染色により血管内皮細胞を同定し、壊死性・半月体形成性病変と糸球体内皮細胞傷害の関連について検討した。すべての疾患で、急性期の壊死性糸球体病変には CD34 陽性の糸球体係蹄内皮細胞の消失を伴っていた。CD34 陽性細胞の消失範囲の拡大とともに、糸球体にはフィブリンの析出や糸球体基底膜の断裂がみられ、周囲に細胞性半月体の形成を認めた。電顕所見では、フィブリンの析出とともに糸球体係蹄の破壊がみられた。壊死性・半月体形成性病変が慢性期へと移行すると、CD34 陽性糸球体係蹄の消失範囲が拡大し、糸球体硬化病変の進展がみられ、細胞性半月体も線維細胞性半月体から線維性半月体へと移行した。半月体を伴わずに残存する糸球体分葉も、慢性期になると糸球体虚脱傾向を認め、内皮細胞消失を伴い糸球体硬化の進展がみられた。

壊死性・半月体形成性糸球体病変は、異なる病態により発症する場合でも、その病変形成には内皮細胞傷害を伴う糸球体係蹄の消失が関連していた。その進展には、糸球体毛細血管の脱落の拡大による糸球体硬化の進展と線維性半月体への移行が認められた。壊死性・半月体形成性糸球体腎炎の発症、進展には、糸球体内皮細胞傷害が関連している。